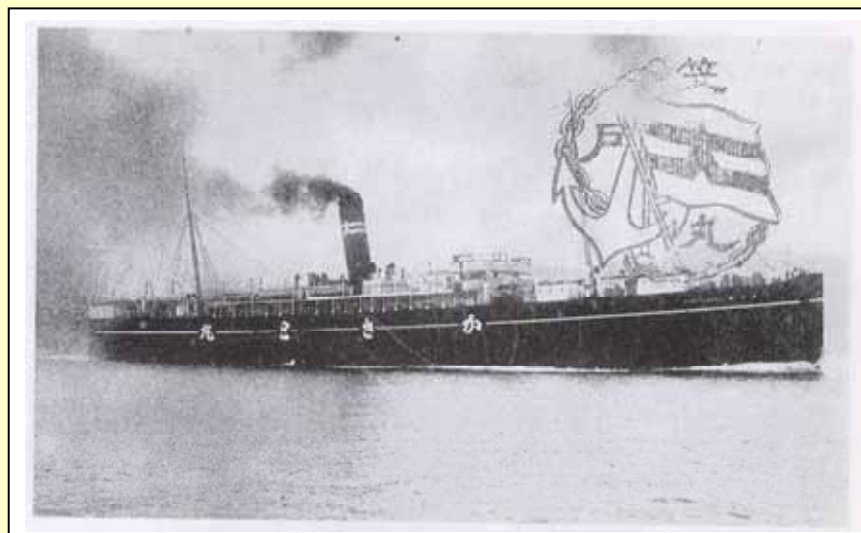


近江の人びと海をわたる ～滋賀県海外移住者の歩んだ道～

日本とブラジルの間に国交が樹立して、日本人移民が初めてブラジルのサントス港に入ったのは明治41年(1908)6月18日のことでした。今年2008年は「ブラジル移民100年」という節目にあたり、移民についての話題に触れる機会が多い一年となりました。

滋賀県民の海外移住は明治18年(1885)に始まったハワイへの移民に始まります。後に、滋賀県で初めて3名の移民がブラジルへ渡った明治45年(1912)までの間にも、カナダ、アメリカ、ペルー、メキシコ、フィリピンへと滋賀県から移住した人々がありました。特に、カナダへの移住についてはその数が他に比べて極めて多く、現地では滋賀県色豊かな日本人社会が生まれるなど、その生きいきとした当時の様子を物語る資料が県立図書館に多くあります。今回は、これらの資料を通して、滋賀県から海を渡り海外に移住した人々の足跡を、カナダにその焦点をあててたどります。



多くの移民を運んだ「かさと丸」

『海を渡った近江の人たち』川崎愛著作 滋賀県発行(1986)より



「朝日新聞 京都附録」大正2年（1913）9月5日
連載記事「浪がしら」より

INDEX

（特集）近江の人々海をわたる ～滋賀県海外移住者の歩んだ道～・・・1～4面
 ひとくち源氏物語 4・比叡山・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5面
 今月のBOOKまーく・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5面
 FKASH ふらッシュ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6面
 今月のデジタルアルバム帖・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6面
 郷土資料紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7面

図書館の催し

土曜サロン

- 12月6日(土) 午後5時～ 1階ロビー
 「クリスマスオラトリオ」(バッハ)メサイア合唱団と草津チェンバーオーケストラ
 & 「オーロラスライドショー」(堀田東氏作成)
- 1月24日(土) 午後5時～ 1階ロビー
 「新春のウィーンワルツ」草津チェンバーとワルツを歌う仲間

人権啓発資料展

12月3日(水)～27日(土) 参考資料室

おはなし会

12月19日(金)・1月16日(金) 午前11時と午後3時の2回 1階談話室

近江の人びと海をわたる ～滋賀県海外移住者の歩んだ道～

「海外渡航熱」のはじまり

明治 29 年(1896)に滋賀県を襲った大風水害は、ことに犬上郡の八坂、三津屋、大藪、開出今をはじめとする湖岸の住民を苦しめました。生活の糧である田畑の冠水等により、その日の生活もままならず、人々は途方に暮れたといえます。

当時の全国各県では、明治 10 年頃より始まった政府の海外発展政策により、農民や漁民を中心に、貧困から逃れるため、海外に渡る人々が増加しました。滋賀県からも、この明治 29 年以降、風水害の打撃を受けた犬上郡の人々を中心に特に北米カナダへの海外移住者が増加し、明治 43 年(1910)にはカナダ在留県人が 1,854 名と第 1 位を占めるほどでした。

『移住滋賀』 滋賀県編刊 1977 年

『海を渡った近江の人たち 滋賀県海外移住史』

川崎愛作著 滋賀県 1986 年

バンクーバー 「晩香坡」に糧を求めて

日本からの移住者が増え始めた明治 23 年(1890)頃のカナダはまだ開発途上期で、豊富な森林資源を利用した森林伐採・木材交易が当時最も盛んな産業でした。天然の良港であるバンクーバーには「ソーミル」と呼ばれる製材会社が数多く、勤勉な日本人労働者は喜んで受け入れられました。明治時代の日本の日雇い賃金と比較して約 10 倍もの賃金が手に入る「ソーミル」は、ほとんどが貧農出身の日本人移住者にとっては格好の仕事口でした。出身県によっては移住者の大部分が漁業に従事するなかで、湖国出身の移住者にとっては不慣れな漁業に従事するよりも「ソーミル」に従事するほうが適していたようです。

「立命館大学人文科学研究所紀要 第 14 号

湖東移民村の研究」1964 年

『日本人カナダ移民史』佐々木敏二編著 不二出版 1999 年

パウエル街の人びと

日本人の多くが働いていた製材会社である「ヘステングス・ソーミル」という会社がバンクーバー市のアレキサンダー街にあり、この隣町パウエル街には、日本人相手の下宿屋や商店ができはじめ、やがて日本人町として、異国に暮らす多くの日本人移住者の心の拠りどころとなりました。

このパウエル街に立ち並ぶ商店の約 7 割は滋賀県人が経営者でした。明治 42 年(1909)に作成された居住者名簿には、パウエル街で雑貨商、食料品店、時計商、理髪、料理店、旅館等を営む滋賀県出身者の名が連なり、実際にこれらの商店の広告が、1907 年にバンクーバーで日本人によって創刊された新聞「大陸日報」に掲載されています。

後の大正 2 年(1913)9 月 8 日、「朝日新聞京都付録」は「滋賀縣の海外渡航熱」を報じ、連載記事「浪がしら」が始まります。これは滋賀県から「米国加奈陀等へ渡航」した人々の消息を一葉の肖像写真を添えて報じたもので、なかには、明治末年当時のパウエル街の人々の子孫の様子を語る記事もあり、これらの資料は、異国の地「加奈陀」で懸命に生きる湖国滋賀県出身の人々の活躍を生々しく現在に伝えてくれます。



「大陸日報」明治41年(1908)1月9日の紙面より

労苦をこえて

日本政府による満州経営とは異なり、北米移民に対する国家の保護は全くありませんでした。現地では、同郷の人々が一カ所に集まりすぎたことで、様々な排日的迫害を受けることもありました。明治40年(1907)にはパウエル街も暴徒と化した群集に襲撃されました。この事件をきっかけに、翌年には日加両国政府の間に協定が成立し、年間のカナダ移民の人数が制限されることになりました。

昭和16年(1941)の第二次世界大戦の勃発により、カナダ政府が全日系人に強制立ち退きを命じたことで、移住者たちは、それまで代々にわたって築いてきた地盤を涙をのんで手ばなすしかありませんでした。その後昭和20年(1945)に終戦を迎え、カナダ政府により日本人に対して再定住の援護が与えられました。日本への帰還者のうち半数は戦後再びカナダに渡っています。再定住者は全カナダに分散され、かつての日本人移民社会の閉鎖的な性格は薄らいだといえます。

『開出今物語 - 梅の花と楓 - 彦根市開出今とその移民史』
 松宮増雄著刊 1984年
 『わたしの歩んだ道 郷土の偉人ドクター・ミヤザキ』彦根市
 開出今町町内会 編刊 1987年

多文化社会に暮らす人々とともに

外国で暮らす人々にとって不安なのは、言葉の問題です。母国語に接する機会が少ない中で、自分の国の言葉で書かれた書物を読むことは、楽しみのひとつです。

現在、カナダの図書館では、在住外国人に対する図書館サービスが充実しています。移住者にとっても図書館が生活になくてはならないものとなっているのです。滋賀県には、現在88カ国3万1千人以上の外国人が在住しています。県立図書館は、「すべての住民のための図書館」です。読書を楽しむ場所、生活に必要な情報を得る場所として、在住外国人に対するきめこまかなサービスを一層充実してゆかなければなりません。

ひとくち源氏物語 4 . 比叡山

比叡山は最澄が天台宗を開立し、延暦寺を創建した地です。この地が平安京北東の鬼門にあたり、災いを封じるといわれるもあろうようです。

比叡山や延暦寺の東塔、西塔、横川の三塔の名は源氏物語の中でも度々登場します。

「夕顔」の帖で、六条御息所の生霊にとりつかれて殺されてしまった夕顔の四十九日法要が秘めやかに行われたのが比叡山でした。

また「手習」の帖では、浮舟が薫大将と匂宮の求愛に思い悩んで、宇治川に身を投げる場面がありますが、命を取り留めた浮舟を助け、出家させた人物として比叡山、横川の僧都が登場します。

そして、「手習」に続く「夢浮橋」の帖では、薫大将が比叡山東塔の根本中堂に月参りの帰途、横川の僧都を訪ねて、浮舟との仲介を頼んでいます。

このように、比叡山が物語の名場面に登場するのは、栄華の中にある「人の世のあわれ」への救いをこの地に求めていたからかもしれません。



『日本書誌学大系 絵入本源氏物語考』「手習」
青裳堂書店発行(1987)より

今月のブックマーク 図書館に新しい本が書棚に並ぶまで



図書館には毎週200～300冊の新刊図書が入ってきます。その内訳は図書館が選んだ新刊図書と利用者の方々からいただいたリクエスト本です。

新刊図書が図書館に入るまでの流れは、まず本の取次会社が出している発売前の新刊図書の情報を毎日入手します。それらを一週間まとめて毎週選書会議を開きます。図書館として長く利用される本や、その時々に必要な不可欠な本を出版社や著者を参考に選定します。選定した本はすぐさま書店に注文を出し、1～2週間のうちに約9割の図書を入手します。受入れた図書は、どの棚にあると最も利用しやすいか、また検索機で探しやすいかなどを考えて背ラベルの番号を決めます。選書 発注 受入 整理 装備(ラベル、付属資料貼付)というすべての行程が済んだ図書は、週末の利用に間に合うよう配架するとともに、冊子体の新着図書目録(書名編、分類編)を作成し一般閲覧室に置いています。

FLASH ふらッシュ

県内48館目の公立図書館オープン！

「あかねさす 紫野行き標野行き 野守りは見ずや 君が袖ふる」(額田王)

万葉集で有名なこの歌の舞台である東近江市の蒲生地区に11月1日、市内で7番目の図書館がオープンしました。閲覧室の広さは約800㎡、オープン時の蔵書数4万5千冊(内児童書1万2千冊) 雑誌130タイトル、職員4名(うち2名臨時)でスタートしました。旧蒲生町時代から図書館設置の要望が高く、平成18年東近江市との合併で、東近江市立図書館のあり方委員会が設置され、蒲生地区に地域図書館が必要であるとまとめられ、施設の有効利用で支所を改修し、1階に図書館、市民生活課、2階に地域振興課、産業建設課、福祉課の設置で生まれ変わりました。

「人と人、人と本との出会いの場を大切にしながら蒲生図書館は支所との連携において、地域の資源や文化を生かした豊かなまちづくりを進めるための情報発信をしてゆきたいと考えています。」との異館長の言葉でした。

東近江市立蒲生図書館

〒529-1592 東近江市市子川原町676番地

TEL 0748-55-5701 FAX 0748-55-570



東近江市立蒲生図書館竣工式にて

今月のデジタルアルバム帖 12・1月「近江百人一首」の世界

古事記・日本書紀の時代から、滋賀の風土は旅情をさそう魅力ある名所として知られ、「記紀歌謡」に始まり「新古今和歌集」までの歌集の中に、近江を歌った詩歌が約2,200種も見られます。その多くの和歌の中から百首が平成元年に選定され、「近江百人一首」として滋賀県教育委員会から出版されました。その一部をご紹介します予定です。(右図：近江の海)



郷土資料紹介

平成20年9月～10月購入・寄贈分

琵琶湖文化館のあゆみ 滋賀県博物館史事始め
滋賀県立琵琶湖文化館編刊 2008年
中江藤樹一日一言 孝を尽くし徳を養う
中江藤樹著 中江彰編 致知出版社 2008年
出庭神社の神事と村定
奥山芳夫著 滋賀民俗学会 2008年
古墳と寺院 琵琶湖をめぐる古代王権
田中勝弘著 サンライズ出版 2008年
「本能寺の変」はなぜ起こったか 信長暗殺の真実
津本陽著 角川書店 2008年
歩いて知る浅井(あざい)氏の興亡 戦国浅井戦記
長浜市長浜城歴史博物館編著 サンライズ出版
2008年
史眼 縦横無尽対談集
津本陽, 井伊達夫著 宮帯出版社 2008年
埋木舎と井伊直弼
大久保治男著 サンライズ出版 2008年
浅井(あざい)長政のすべて
小和田哲男編 新人物往来社 2008年

現代貧乏物語
前川文夫著刊 2008年
やさしい心をもっていますか? 障害児と共に生き、社会と闘い、心を守った、ほんとうの教育
福井達雨著 サンガ 2008年
オサムシ 飛ぶことを忘れた虫の魅惑
八尋克郎編 八坂書房 2008年
平安時代の納豆を味わう
松本忠久著 丸善プラネット 2008年
背中 石内秀典詩集
石内秀典著 UNIO 2008年
ダーウィン17世 森哲弥詩集
森哲弥著 編集工房ノア 2008年
多賀女
水上あや著 叢文社 2008年
生かされて生きる
久保田暁一著 だるま書房 2008年
私達夫婦の戦争と平和
馬場明著刊 2008年